

現代青年の生活時間 —研究委員会共同調査の結果に基づく検討—

企画者：日本青年心理学会研究委員会
話題提供者：坂田 浩之（大阪樟蔭女子大学）
話題提供者：丹羽 智美（四天王寺大学）
指定討論者：佐橋 由美 #（大阪樟蔭女子大学）
指定討論者：浅岡 章一 #（江戸川大学）
指定討論者：速水 敏彦（中部大学）
司 会：高坂 康雅（和光大学）

企画趣旨

研究委員会は、2009年に長期的研究テーマ(3年間)のもとに単年度の研究テーマを設定して課題を追求するという活動方針を立てた。2009年から2011年までの第1クールでは「青年と教育(機関)」、2012年から2014年までの第2クールでは「青年とは誰なのか」というテーマを設定し、研究委員会による独自の調査をもとに議論を重ねた。

2015年から始まった第3クールでは、「現代青年を取り巻く時代・文化」を長期的研究テーマとした。西平(1983, 1990)は、青年らしさとして発達過程で示す諸特性である「青年性」、歴史文化的な影響によって表現された「世代性」、個人差を中心としてみる「個別性」という青年分析の3つ視点を提唱している。第2クールが「青年とは誰なのか」という「青年性」に関わるテーマであったとすると、第3クールの長期的テーマは「世代性」に関わるものであるといえる。

“ゆとり世代”と称されることもある現代青年が、実際には余裕もなく、何かに追い立てられるように日々を送っていることが指摘されている。現代の青年はどのような日常生活を過ごしているのだろうか。本シンポジウムでは、青年の生活時間の実像を実証的データに基づいて検討し、現代を生きる青年の理解を深めることを目的とする。

シンポジウムテーマ設定に至るまでの経緯

2015年は短期的テーマを「マンガ・アニメ」として、2月のワークショップでは、現代青年を取り巻くマンガ・アニメの現状や青年に及ぼす影響について議論した。その議論を踏まえて、11月のシンポジウムでは研究委員会による大学生への調査結果に基づき、青年のマンガ・アニメ・ゲームへコミットする程度によるパーソナリティ的特徴の違いを検討した。さらに、マンガ・アニメ・ゲームに時間やお金をかけていない大学生が多くいることも報告された。マンガ・アニメ・ゲームの内容およびそれらに対する青年の関わり方の多様性に注意を向ける必要があることが議論された。

このような「マンガ・アニメ・ゲーム」の検討を踏まえて、青年はどのような時間を過ごしているのか、その生活時間に現代的な特徴はみられるのかという問題提起がなされた。そこで、2016年2月に、“現代青年の生活時間—各種調査にみる余暇的時間とその推移”というテーマでワークショップをおこなった。このワークショップでは、各種調査で得ら

れた青年の生活時間、特に余暇時間の年代的推移に着目して議論した。そのなかで、現代青年は余裕があるのか、時間的余裕はある方がいいのか、余暇など生活時間の持ち方が青年の精神的健康や発達とどのように関係しているのかという問いが立てられた。

国民生活時間調査(放送文化協会, 1965-2016)によれば、1995年から2015年にかけて10代の「拘束行動」(学業、通学など)は微増、「自由行動」(会話・交際、レジャー活動)は微減している(**Figure 1**)。50年間の「自由行動」の推移をみると、レジャー活動ではネット利用時間の増加がみられ、テレビ視聴時間の低下に伴いマスメディア接触時間は低減傾向にある。このように、時代を経て生活時間が変化していくなかで、現代青年が過ごしている実際の生活時間とその心理的影響を明らかにすることは有意義である。

シンポジウムのテーマと検討すべき課題

加藤・斎藤(1966)は、青年期の人格形成における余暇の重要性を論じた。現代大学生の特徴が勉学志向へと変化しており、厳しい就職環境のなかで「勉学第一」と答えておかないと不安だという学生の存在が指摘されている(溝上, 2010)。さらに、村澤・山尾・村澤(2012)による「ポストモラトリアム」(現代のリスク社会で「自己責任」の名の下に、より个性的で自律的であることを強要される)、高坂(2016)による「リスク回避型モラトリアム」(何にでも参加し、まじめで資格志向が強く、既存の友人とのつながりを重視するが、周りから遅れをとることへの不安をもっている)が提唱されている。社会構造の変化に伴い、青年の日常生活の過ごし方にも変化がみられるといえる。

本シンポジウムでは、研究委員会による質問紙調査を大学生・短期大学生へ実施し、現代青年の生活時間について明らかにする。具体的には、平日、土曜日、日曜日における余暇時間、睡眠時間、インターネット使用時間、時間の使い方に対する満足度とその理由について尋ねる。さらに、睡眠や経済状況、アイデンティティ、大人感、共感性を取りあげて、日常生活の過ごし方との関連を検討する。

本シンポジウムでは、坂田浩之委員と丹羽智美委員が共同調査の結果を中心に話題提供をおこなう。そして、余暇行動やレジャーの研究に取り組んでいる佐橋由美先生、若者の睡眠研究に取り組んでいる浅岡章一先生、青年心理学研究の視点からレジャーの心理学にも造詣が深い速水敏彦会員に指定討論を求める。本シンポジウムをとおして、生活時間からみえてくる現代青年の特徴や困難について、議論を深めていきたい。

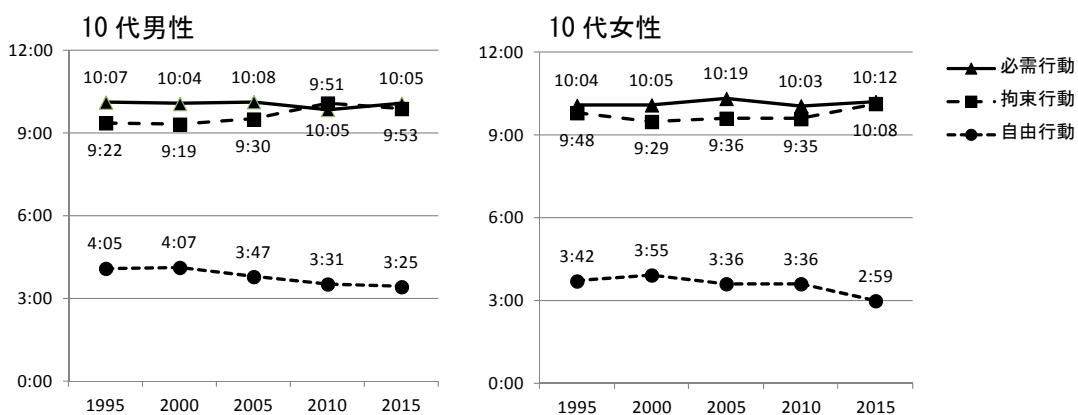


Figure 1 10代における平日の生活時間の推移(国民生活時間調査, 1996-2016)